

探訪 北の風景 78

木田金次郎美術館 後志管内岩内町

青木和弘



「道の駅いわない」などがある旧国鉄岩内駅跡地に木田金次郎美術館がある。「漁民画家」と呼ばれた木田金次郎は、有島武郎の小説「生まれ出づる悩み」のモデルである。木田が生まれたのは1893年（明治26年）。17歳のとき札幌で見た有島の絵に感動し、自分が描いたスケッチを抱えて有島の自宅を訪ね、そこで絵の才能を見いだされた。しかし、家業不振のため漁業に従事するが、絵画への夢を断ち切れず、7年後の初冬、24歳の木田は有島に会いに狩太村（現ニセコ町）まで行く。二人は有島農場で夜を徹して語りあい、その顛末が、翌1918年3月からの新聞小説「生まれ

れ出づる悩み」で描かれ、地元の岩内でも大きな話題になった。

木田は漁師をつづけながら絵を描いた。有島は木田の後ろ盾となって画業を支援する。1919年2月には「木田金次郎氏習作作品展覧会」を東京の有島邸で開いた。デッサン35点、観覧者が125人あり、売り上げが171円。諸経費を差し引いた収入が111円40銭になった。木田はこれで画材を購入しているのだが、この111円40銭は、現在ならどれほどの金額なのかを計算してみた。当時の大工の1日の手間賃2・9円と、2020年の同2万1000円を比べると、7241・4倍だから、木田の手取り収入は80万6692円になる。何の値で比較するかで大きな変動があるのだが、大雑把な目安にはなるだろう。売り上げを同様に計算すると習作のデッサン1枚当たり3万5千円以上の値が付いたことになる。まだ実績のない画家としては破格な値段ではないだろうか。

1923年、木田が30歳になる間に有島の計報が届いた。その衝撃は想像に余りある。葬儀に出席した木田は、そこで漁師をやめ、画業に専念する決意を固めたという。それでも木田は有島の勧め通り、地元を離れることなく岩内の自然を独自の境地で描きつづけた。

木田は1953年、60歳にして初めての個展を札幌の丸井今井百貨店で開き、油絵106点を出



いわない高原ホテルから見渡す岩内港。遠くに泊原子力発電所が見える。原発建設での漁業権放棄と、米ソの200海里漁業専管水域設定で、岩内の漁業は衰退し、就労人口に占める漁業者の割合はいまや1.3%にすぎない（2015年国勢調査より）

品している。やっと生活に安定の兆しが見えはじめたさなかの1954年9月、岩内大火で自宅と作品約1500点を焼失する。しかし、木田はそこからすぐに立ち上がった。周囲の支援もあって住宅を新築し、画業に専念して新たなスタイルを獲得した。

1959年には、朝日新聞社主催の「木田金次郎作品展」が東京・日本橋高島屋、仙台・丸光百貨店、札幌・丸井今井百貨店を巡回。画家として順風満帆とみられたこの時期、新たな巡回展を準備中の1962年12月15日、脳出血のため急逝した。享年69歳だった。

木田の死後、文子夫人が目指したのは木田の画



木田金次郎美術館の屋上から眺める岩内岳。木田はこの山を数多く描いている。文子夫人は「裾野には円山・竹の子山という二つの子山を抱き、どんな風に見ても母情溢れる女性の姿である」と書き残している

筒型と箱形を合わせて鉄道の
 転車台をイメージして外
 観をデザインした木田金次
 郎美術館。現在、外壁改修
 工事がおこなわれていた



道の駅の向かい、さきや
 食堂の「えびラーメン」
 は、和だしと合わせたラー
 メンスープが良く合う

業を未来に残すこと。①できることなら金次郎の
 作品を買いもどす②金次郎の美術館を岩内に建て
 る③金次郎の遺稿集を出版する―だった。美術館
 は1994年、長男の木田尚斌（なおたけ）氏が
 設計を手がけ、鉄道の転車台をイメージした外観
 で建設され開館した。コレクションは企業や団体
 から美術館に寄贈され、文子夫人の寄贈90点と合
 わせて160点まで充実したので、買い戻しでは
 ないが目的は果たされたと見ている。木田の遺稿
 集も出版された。

美術館の屋上から木田の愛した岩内の風景が36
 0度見渡せる。100年以上も前に木田の眺めた風
 景が、山や森、岩や波、風と雪、花と温もり、漁船
 の群れ、時空を越え、多彩な色彩と奔放な筆致で見
 る者の心に語りかけてくる。せひ、足を運んでほしい。